

3.3 観光被害

(1) はじめに

本稿の課題は、筆者が専攻する経営管理および BCP（事業継続計画）の方法をもとに、筆者の関係学生、愛媛県の中小企業経営者、被災自治体職員の協力を得て、2018 年（H30 年）7 月の西日本豪雨災害と観光振興の現状と課題について、愛媛県大洲市と西予市の事例を検討することにある。ただし本稿は現時点での初歩的な活動の記録として記す。

(2) 豪雨災害と観光振興の現状と課題—大洲市・西予市の事例—

7 月の西日本豪雨は、愛媛県に過去に経験のない甚大な被害をもたらした。豪雨により愛媛県内各地、南予の観光施設の被災やイベントの中止が相次ぎ、風評被害も相まって地域に影を落とした。関係者は少しでも活気を取り戻そうと、営業再開や観光客呼び込みへ汗を流してきた。観光資源は住民にとっては自然・歴史・文化など貴重な存在であり、労働と生活の拠点であり、観光客にとっては目的であり、観光資源と観光業の復旧・復興と振興が求められている。2019 年 1 月末、災害から半年を経た現在、災害がこの地域の観光振興に与えた損害は大きく、復旧や復興は未だ途上にある。

A) 大洲市の豪雨災害と観光振興

市内主要観光施設のうち、中心部の大洲城や臥龍山荘など 5 施設は被災しなかったが、7 月は前年比約 26～50% の落ち込みになった。4 月～12 月の合計は、401,150 人で前年同月と比較して-70,938 人となった。特に 7 月から 10 月の客数の減少が顕著である。

なかでも、大洲市の夏の風物詩「鶉（う）飼い」は、6 月 1 日～9 月 20 日の営業期間のうち、8 月 6 日までの約 1 カ月間、休止を余儀なくされた。前年同期間には 2475 人を数えた観覧客が、今年度に限ってはなかった。8 月 7 日、別の乗船場を整備し、再開したが、21 日までで 513 人と前年同期間の半分に満たなかった。鶉飼い船から楽しめる花火大会が 3 日間とも中止したことも復興途上を思わせた。「鶉（う）飼い」客 1 人当たりの単価は料理だけで 6 千～8 千円、宿泊パックは 1 万 2 千円であり、地域経済への影響は大きい。客の中には、復興の思いから、高い料理をあえて注文したり、ボランティアを終えてから鶉飼いを楽しむ客もあった。

浸水の様子がテレビで報道された道の駅「清流の里ひじかわ」は 8 月 8 日から一部で営業を再開し、1 月末、事業者の交代などがあり、徐々に営業する店舗が増えてきた。同所は道の駅であるとともに、肱川町民の生活を支える拠点でもあり、被害は住民生活に直結することから、経営者は全力で復旧させ、経営再開に取り組んでいた。

大洲家族旅行村のキャンプ場は、昨年 7～8 月、約 1 万人が利用したが、進入道路が崩落し、現在も利用休止である。



写真 3.3-1 客が戻る道の駅清流の里ひじかわ



写真 3.3-2 営業再開を待つテナント

表 3.3-1 大洲市主要観光施設入り込み状況 (H30 年度)

<単位：人>

施設名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
臥龍山荘	4,144	4,654	3,154	1,222	2,193	2,491	3,760	8,084	3,225	32,927
H29比較	227	-1,324	138	-1,288	-932	15	1,044	2,773	961	1614
大洲家族旅行村	2,741	2,786	3,376	33	0	0	0	0	0	8,936
H29比較	40	-391	1,122	-4,456	-5,565	-4,928	-1,248	-699	-341	-16,466
おおず赤煉瓦館	4,364	8,787	2,946	993	2,745	1,970	2,726	8,707	2,613	35,851
H29比較	215	-1,125	444	-2,710	-3,147	-845	-481	1,205	856	-5,588
大洲城	4,212	4,827	2,217	966	2,770	2,167	2,739	3,268	2,172	25,338
H29比較	-200	-778	69	-1,651	-1,782	-276	411	-564	-26	-4,797
あさもや	19,807	18,760	13,919	7,117	12,651	13,809	16,546	26,251	13,418	142,278
H29比較	-16	-3,551	-951	-7,018	-3,241	-343	2,691	6,808	3,931	-1,690
思ひ出倉庫	1,020	1,175	628	188	603	623	656	839	386	6,118
H29比較	203	-315	63	-546	-480	2	161	-9	64	-857
清流の里ひじかわ	25,456	26,420	19,788	2,782	10,596	14,730	17,636	17,302	14,992	149,702
H29比較	-1,426	-212	-4,414	-13,016	-10,122	-5,812	-2,928	-4,640	-4,584	-43,154
合計	61,744	67,409	46,028	13,301	31,558	35,790	44,063	64,451	36,806	401,150
H29比較	-957	-7,696	471	-30,685	-25,269	-12,187	-350	4,874	861	-70,938

出所)大洲市役所

B) 西予市の豪雨災害と観光振興

西予市役所によると、観光資源のうち大きな被害があった乙亥会館（野村町）、桂川溪谷、三滝溪谷は再開時期は未定である。また名水百選・観音水（宇和町）、狩浜の段々畑が被災した。観光施設のうち休業しているのがカロト温泉（野村町）、クアテルメ宝泉坊（城川町）で、西予市によると再開時期は未定である。また宿泊施設のうち野村ロッジ、桂川溪谷キャンプ場、竜沢寺緑地公園キャンプ場の再開時期は未定である。

西予市野村町の主要な観光施設である乙亥会館は、2005年に開館した両国国技館を模した建物で、毎年、乙亥大相撲が開かれ、2017年愛媛国体の相撲競技会場にもなった。豪雨による甚大な被害を受け、再開が望まれており、2019年度中の完成を目指している。館内の温泉施設「カロト温泉」の年間利用者は約4万人だったが、肱川の氾濫により入浴設備や機械類が水没したため営業を休止していた。12月14日、乙亥会館の復旧検討委員会は営業再開を断念し、温泉施設をトレーニング室などに変更して、シャワー室を設けることを発表した。またレストランは休憩室に変更し、災害に関する展示室を新設することとした。地元関係者などで行った検討委は、温泉施設をトレーニング室などに変更し、シャワー室を設ける予定である。またレストランは休憩室に変更し、災害に関する展示室を新設する。



写真 3.3-3 対岸から乙亥会館を見る



写真 3.3-4 乙亥会館と肱川

宇和町の名水百選・観音水の源泉は無事だったが、山林からの雨が市道に流れ込み、名水亭（そうめん流し）への遊歩道とトイレが被災した。8月末、市道復旧により取水（水汲み）が可能になった。復旧に時間を要するため、この年の名水亭の営業は実施できなかった。次年度の再開が望まれている。

11月の普通の週末、野村大橋から乙亥会館を見ると、地域には災害の傷跡が残るものの肱川は穏やかな流れだった。この川が氾濫し、会館や両岸地域に浸水したことは信じがたい。自然と人間社会が相まって発生した災害の大きな、恐ろしさを想い浮かべた、地域の復興を願った。



写真 3.3-5 清掃された名水亭と遊歩道



写真 3.3-6 名水百選・観音水

(3) 学生の観光業訪問と検討

愛媛大学の学生有志は、7月豪雨災害後の最初の週末、中島諸島での観光に関する研修合宿を予定しており、滞在先で豪雨と災害についての体験を聞き、ミカン山の被害などを視察した。滞在中は海岸などの清掃などを行った。8月には岡山県真備町を訪問して被災状況やボランティアの活動を把握した。

9月と11月、大洲市と西予市の観光地を訪問し、住民との対話を行った。7月豪雨災害の爪痕を確認しながら、観光地の様子、観光業の再開を把握した。学生は森山の大成橋の崩落現場と浸水した大川郵便局、肱川町などを視察し、鉄橋をも壊す洪水の威力の大きさに驚いた。また乙亥会館周辺を視察し、洪水の高さと広さ、浸水と住宅への被害に驚いた。住民との対話では、肱川町で小売業を営む住民から当日の浸水の様子や営業再開の志、仲間との支え合いなどを聞き、公的補助の円滑な実施などを検討した。野村町で農作物の生産・販売を営む住民から洪水の様子、地域での生活を継続する人、地域を離れる人の様子などを聞き、地域の抱える問題と住民生活あつての観光振興の今後を検討している。

9月には学生は西予市社会福祉協議会におかれたボランティアセンターで活動についてスタッフと対話した。この時期にはボランティアの要望などは減っていたが、7月～8月の時期の活動や愛媛県内外からのボランティアの動向を聞き、学生や市民の関わり方、他の地域との交流の大切さを検討した。



写真 3.3-7 崩落した大成橋を視察



写真 3.3-8 鹿野川ダムを視察



写真 3. 3-9 被災者との対話（道の駅清流の里ひじかわ）



写真 3. 3-10 野村町住民との対話（百姓百品）



写真 3. 3-11 清掃する学生（乙亥会館）



写真 3. 3-12 清掃する学生（乙亥会館）



写真 3. 3-13 ボランティアセンター



写真 3. 3-14 ボランティアの活動紹介

(4) まとめ

2019年1月末、豪雨災害から半年を経た現在、災害がこの地域の観光振興に与えた損害は大きく、復旧や復興は未だ途上にある。一般にBCPの方法は、①BCP発動フェーズ、②業務再開フェーズ、③業務回復フェーズ、④全面復旧フェーズから災害のあった事業の継続を評価し対策を講じる。しかし、BCPは大手企業などにおいては実施されているものの、中小企業においては遅れが指摘されており、大洲市と西予市の観光業においてはBCPの確立は今後の課題である。

観光業の経営者、関係者、住民は、人不足、働き方改革、広報・マーケティング、資金繰りなど、困難を抱えつつも、多様な歩みを展開している。観光業を支援する中小企業関係者、被災自治体・行政職員、大学教員等は、当事者の声に耳を傾け、共に歩む言動が求められる。

<キーワード>

BCPの方法：事業継続計画 Business continuity planning, BCPは、災害などの緊急事態が発生したときに、企業が損害を最小限に抑え、事業の継続や復旧を図るための計画を指す。経産省「事業継続計画策定ガイドライン」を参照。

*本稿執筆に当たっては、愛媛大学学生の協力を得た。記して感謝の意に代えたい。